



山中 智裕 (やまなか ともひろ) 由木中央小 6年生

作品名：レ・ミゼラブルを読んで

図 書：レ・ミゼラブル

「貧しき人」その姿は、悲しくもあり、力強くもあった。絶望した人、希望を持つ人、人をねたみ欲におぼれた人、純粋な心を持つ人、それぞれの人たちが、様々な出来事を通して、関わり、つながっていった。

物語の中で、僕が一番心打たれた人、それはジャン・ヴァルジャンだ。彼はたった一つのパンを盗んだ罪で、十九年間、牢につながれた元徒刑囚である。彼の心は絶望し、乾ききっていた。町の人は彼を軽蔑し、追い払った。そうした周りの環境は、彼の乾ききった心を、さらに凍りつかせていった。その時、彼は神父と出会う。彼は、神父から銀の食器を盗んだ。そんな彼を、神父は、許すばかりでなく大切な銀の燭台までも与えたのだ。その時から、彼は変わった。ジャン・ヴァルジャンは、貧しき者、弱き者を助けるために、力を尽くした。周りの人の存在は、時に人の運命までも変えてしまうんだなあと思った。

はじめ、周りの人から決して受け入れられることのなかったジャン・ヴァルジャンは、自分の存在価値を見失い、何も感じなくなっていた。しかし、神父から自分の全てを受け入れられ、価値ある者として扱われたことが、彼の心を変えた。自分自身に存在価値がある事に気がつき、生きる意味を見出したのだと思う。彼は、神父が自分にしてくれた様に、どんな人でも受け入れ与える行動を、自分の使命として果たしていった。さらに、孤児のコゼットを育て、心から人を愛することを知る。彼が年老いて死を迎える時も、そこには最愛のコゼットがいた。人の幸せを願い続けた彼の心は、最期も希望に満ちていた。

もう一人、忘れられない人、それは警部ジャベールだ。彼は、権力を尊敬し、反抗を憎んだ。彼は極端な程、国家の規則を信じきっていた。見張ること、取り締まることが、彼の全てだった。ジャベールは、徒刑囚ジャン・ヴァルジャンを追い続ける。それが彼の使命だったからだ。僕は、冷血なジャベールが嫌いだった。でも彼は、ジャン・ヴァルジャンの偉業を目の前にして、捕えるのを止め、自殺してしまう。その時になってはじめて、僕はジャベールが弱き人であったことに気が付いた。それまで信じてきた彼の使命が崩れ、きっと自分の存在価値を見失ってしまったのだと思う。僕は彼にも生きてほしかった。

ジャン・ヴァルジャンとジャベール、それぞれの使命を果たそうとする二人の姿は、力強く、少し似ていた。けれど、ジャン・ヴァルジャンは、自分の心の中の考えや感情から使命を見出していたのに対して、ジャベールは、規則から抜け出せず、自分の心の中にあるものを使命として見出せなかった。だから、規則よりも自分の感情を優先してしまった事を、自分で受け入れる事ができなかったのだと思う。この違いが、二人の結末を分けたのかもしれない。もし、ジャベールにも、自分を受け入れてくれる人がいれば、彼は自分を受け入れ、生きることができたのかもしれない。受け入れてくれる人がいるからこそ、自分を受け入れる事ができるのだと思う。

僕にも、自分を受け入れ、応援してくれる人達がいる。僕は、やってみたい事があると、反対されても、失敗する可能性が高くても、挑戦しなくては行けないタイプだ。そんな僕を、みんなは受け入れてくれる。失敗しても、クッションのようにケアしてくれる。おかげで僕は、それを自分らしさだと思える様になった。この本を読んで、自分の個性を受け入れてくれた人達がいたからこそ、自分を好きになれたのだと気がついた。だから、僕もジャン・ヴァルジャンのように、自分が受け入れられた時のうれしかった気持ちを忘れず、自分も相手を受け入れ、みんなの支えになれるような人になりたい。